

トランスナショナル都市化するクアラルンプル

——変貌する熱帯のメトロポリスの民族景観——

藤 巻 正 己 *

I. はじめに

南シナ海をはさんでマレー半島部とボルネオ島北部のサバ・サラワク2州の東西に分かれるマレーシア連邦は、二つの意味でモザイク国家である。第一に、後述のように先着・先住民族を主張するマレー系と、移民集団の末裔としての華人・インド系住民など、多様な民族・宗教・言語的背景を異にするエスニック集団から成っている、第二に、歴史的経緯を異にするさまざまな地域によって成り立っている、という意味においてである。

後者について言えば、同国は、マレー群島の諸地域において18～20世紀に成立した3つの旧英領植民地から構成されていることを強調しておかねばならない。まず、マレーシア連邦の核となったのは、1957年に独立をはたしたマラヤ連邦(旧英領マラヤ、現在の半島マレーシア=西マレーシア)である。その後1963年に、同じく旧英領だったシンガポール(旧英領マラヤの一部、後にシンガポール自治領)と、ボルネオ島北部に位置するサバ(旧英領北ボルネオ)、サラワク(旧英領サラワク)とが加わることにより、マレーシア連邦が結成された。しかし、華人が多数を占めるシンガポールは、民族集団間の調和を標

榜しながら、実態としてはマレー人を優先する連邦政府の国民統合政策に反発して、1965年に分離独立の道を選択した。今日のマレーシア連邦の政治地理的領域や国家的枠組みは、それ以来のものである。

独立以来この国は、着実に経済成長を経験し、1980年代半ばの経済不況、1997/98年のアジア通貨危機をも乗り越えてきた。新経済政策(New Economic Policy: 1971～90年)を通じて、英領マラヤ時代に導入された錫と天然ゴムのモノカルチャー経済からの脱却をはかり、1980年代にはハイテク部門を主軸とする産業国家へと移行することによって、東南アジアではシンガポールに次いでNIES(新興工業経済地域)段階に到達した。

政治社会的にも、1969年5月13日のマレー人と華人との民族衝突をのぞけば、マレー人やその他土着民族集団(ブミプトラ *Bumiputera*)¹⁾、華人、インド系住民などが共存する安定した多民族国家を築いてきた(第1表)。こうした開発政治および国民統合政策の総決算として、1990年代初め、第四代マハティール首相(在任1981～2003年)によって打ち出されたのが「*Wawasan 2020*」(Vision 2020)構想にほかならない。

この長期構想は、マレーシアを2020年までに経済的社会的に先進国家の水準に到達させるとともに、あわせて同年までにマレーシア

* 立命館大学文学部

第1表 マレーシアのエスニック構成：
2000年センサス

	(千人)	(%)
全体	23,274.7	100.0
マレーシア人	21,889.9	94.1
ブミプトラ	14,248.2	65.1
マレー人	(11,680.4)	(53.4)
その他ブミプトラ	(2,567.8)	(11.7)
華人	5,691.9	26.0
インド系	1,680.1	7.7
その他	269.7	1.2
外国人	1,384.8	5.9

(出典) Department of Statistics, Malaysia: 2002

注1) その他のブミプトラ：半島マレーシアのオランダスリ(3グループ/18サブグループ)、サラワクの土着諸民族集団(イバン・ビダユなど約30グループ)、サバの土着諸民族集団(カダザン・クィジャウなど32グループ)。

注2) その他：パンジャブ人(シーク)・タイ人・ビルマ人・ポルトガル人など。

注3) 外国人：インドネシア人・バングラデシュ人・フィリピン人など。

国民のわれわれ意識を、マレー人などブミプトラ、そして華人やインド系というエスニックなるものを越えた、ネーション(国民=民族)としての「マレーシア人」(*Bangsa Malaysia*)意識へ昇華させるべきこと、世界に類例をみない調和と安定にみちた、異民族・異宗教に対し寛容な多民族的国民文化の再構築、つまり「マレーシア的なるもの」の創造に参加すべきことを国民に訴えたものでもある。いいかえれば「*Wawasan 2020*」とは、類まれなる政治的指導力と構想力を兼ね備えた「ストロングマン」マハティール²⁾の約20年に及ぶ政権下、1980年代後半からの経済のグローバル化を好機ととらえ、産業国家へと大変身をとげたマレーシアにとって、エスニック集団間・宗教集団間・地域間の対

立的要素が払しょくされた状態での国民統合こそ、最後に残された国家的企図であることを意味している。

本稿では、以上のような背景をもつマレーシアの首都クアラルンプルが、旧英領植民地都市から現代グローバル化時代のトランスナショナル都市へとどのようにその民族景観を変貌させてきたのかを粗描するとともに、とりわけ1990年代以降の「エスノスケープ」³⁾の変化に着目する。なお「トランスナショナル都市」とは、経済のグローバル化に伴うモノ・資本・情報・ヒトの、これまでに以上の量と速度で国境を越えて流出入するフローの結節点あるいはリレー装置としての役割をはたす都市を意味している。

II. クアラルンプルの民族景観の変貌過程

クアラルンプル(以下、KL)は、その歴史の最初期から西洋支配、アジア系移民労働者の流入を背景に成立、発展してきた多民族複合社会としての歴史を背負って今日に至っているわけであるが、その間、各時代の状況を反映して、各時代特有の多民族的状況、民族景観を現前させてきた。第2表を参照しながら、作業仮説的にエスニック集団の構成比の推移状況にもとづいた時期区分を試み、それぞれの特性を粗描してみるならば、おおよそ以下のようなろう。

[第1期] 英領マラヤ時代～独立期：多民族複合社会出現の時代

人口130万の「熱帯のメトロポリス」KLの歴史はそう古いものではない。19世紀に入ってから本格化したイギリスによるマレー半島

第2表 クアラルンプルのエスニック集団構成比の推移：1891～2000年（単位：％）

エスニック集団	1891年	1911年	1931年	1957年	1970年	1980年	1991年	2000年
マレー／ブミプトラ	12	9	10	15	25	33	37	38
華人	73	67	61	62	55	52	46	43
インド系	12	19	23	17	19	14	11	10
その他 ¹⁾	2	5	7	6	2	1	6	1
外国人	—	—	—	—	—	その他 ²⁾	その他 ²⁾	8
合計（％）	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
合計（万人）	1.9	4.7	11.1	31.6	45.8	92.0 ³⁾	126.2	142.3

注1) パンジャブ人（シーク）・タイ人・ビルマ人・ポルトガル人など。

注2) 1980・90年時には「外国人」は、「その他」の中に含まれている。

注3) 1980年以降、マレーからブミプトラに名称変更。1974年、KLは連邦直轄領に昇格したことに伴い、行政域が拡大したことにより、統計的に人口が大幅に増加したことに注意。

への進出を契機に生まれた植民地都市としての歴史をもつ。

1880年、マレー＝イスラーム国家のスランゴール（Selangor）の首府（スルタン所在地）がKLに遷り、さらに1896年、ペラ（Perak）、スランゴール、スグリシンビラン（Negri Sembilan）、パハン（Pahang）のスルタン国家から成る英国保護領マラヤ連合州（Federated Malay States）の発足以来、KLは英領マラヤの行政中心へとその地位を高めた。さらに1886年には、KL—港市クラン間に錫などの物資を輸送するための軽便鉄道が敷設され、1920年代にはシンガポールとバンコックを結ぶマレー鉄道の要衝地へと発展した。この間に、KLの人口は1891年に1.9万人だったが、1911年には4.7万人に、さらに英領マラヤが絶頂期を迎えた1930年代には人口11万人という一大植民地都市へと成長した（第2表）。

こうしたKLにおける人口の増加は、マレー半島に古くから住み着いていたオランアスリ（Orang Asli）やマレー系先着・先住民の増加によるものというよりも、18～19世紀に本

格化したスマトラ島やジャワ島、カリマンタン島など近隣の周辺諸島域からのミンナカバウ・ジャワ・ブギスなどマレー系諸民族の渡来、錫鉱山労働者（苦力）としての広東・福建・客家などの中国人移民や、鉄道・道路建設およびコーヒーや天然ゴムのプランテーション労働者としてのタミル系インド人などアジア系移民の流入に伴うものであった。

このように、英領マラヤ時代のKLは華人やインド系住民など移民集団が多数を占める「移民都市」、とりわけ「華人大都市」としての性格が濃厚であった。そして他の植民地都市と同様に、KLの社会形態は人種・民族・宗教・言語集団別にすみわけられた、ファーンヴァルのいう「複合社会」（plural society）としての特性をはらむものであった。大まかに言えば、英国人などヨーロッパ人は1897年に完成した最初期の近代的建築物である植民地政庁や、それとパレードストリートをはさんで広がるパダン（padan：広場）横のスランゴールクラブ（支配者層・上層の社交クラブ）が立地するクラン川右岸背後の丘陵地帯（現

在の高級住宅地区)、華人はクラン川左岸のチャイナタウン、マレー人はゴンバック・クラン両河川の合流地点より北部の範域(とくに1899年に「マレー人保留地」として設定された農業集落カンボン・バル *Kampung Baru* 「新村」)に、そうして鉄道関連部門に深く関わったインド系は KL 鉄道駅南部のブリックフィールドズ (Brickfields) や市街地北部のセントゥール (Sentul) の操車場・作業所付近に集住したのである。

[第2期] マラヤ連邦独立以後～ 1980 年代： マレー人増加の時代

第二次大戦後、とりわけ国民国家としてのマラヤ連邦成立(1957年)後、移民の流入が原則として禁止され、マレー人の出生率が華人を上回る状態が続いたことにより、次第にマレー人の人口が増大した。またマレー人が政治の実権を握り、マレー人中心主義政策がマレー人の公務員など都市的職業に従事する機会を増やしたこと、さらに1969年5月13日の民族衝突事件(マレー人による反華人暴動)を契機に、NEPあるいはブミプトラ政策(マレー人の社会経済的地位の向上を目的とする優先政策)が地方農村に集住していた「マレー人の都市化」を誘導したことや中層華人の郊外への流出は、KL 人口の「マレー化」を促したことにより、KL のエスニック構成を大きく変化させ、「マルチエスニック都市」としての風景がより明瞭になった⁴⁾。

[第3期] 1990年代以降～:外国人急増の時代

マレー人の増加/華人比率の減少が継続するとともに、経済のグローバル化に好意したマレーシア経済の急成長は、インドネシア人やバングラデシュ人など外国人労働者の流入を招いた。第2表からうかがわれ

るように、マレーシアの人口センサスの表記において「外国人」が「その他」に含まれるようになったのは1980年人口センサスから、また「外国人」の項目が別に設けられるのは2000年からである。これらのことは、1980年頃から外国人の存在が顕在化し、さらに1990年代に急増したことを示唆している。ちなみに「その他」とはマレー人、華人、インド系住民の三大種族を除くパンジャブ人(シーク)、タイ人、ビルマ人、ポルトガル人などの周縁的エスニックマイノリティ集団を指しているが、1980年と2000年の「その他」が1%であることから、1991年の「その他」に含まれる外国人比率は約5%だったと推定される。とすれば、1991年から2000年までに外国人比率は3%増をみたということになる。つまり、1990年代は外国人急増期であったとみなすことができる。

ここでいう「外国人」とは具体的に誰を指すのだろうか。出身国や民族・文化的背景、KLでの(期間の長短は別として、その)定住理由あるいは職種は多様であろう。少なくとも経験的にいえば、KLの「外国人」とは、外国人ビジネスマン・企業の駐在員(とその家族)か、外国人労働者のいずれかに二分されよう。彼らのKLへの流入は、ある特定の地区や場所に、地元社会とは可視的にも区別された異質な社会空間をつくりだした。前者が集住するのは、緑濃き丘陵や市街地内に造成されたコンドミニアム地区や一戸建て高級住宅地区であり、後者の場合は、郊外のスクォーター集落や建設現場・工場付近の粗末な仮設共同宿舎が集まる地区である。こうした断片的とはいえ、新たな社会空間の分沁は、KLのトランスナショナル都市化を指し示す可視的

現象であると言えよう。

このように KL の風景はどの時期にあってもマルチエスニック的であったわけであるが、植民地支配下における複合社会生成の時期、マレー人あるいはブミプトラを中心とした国民国家建設の時期、そうして経済のグローバル化の進展に伴うトランスナショナルな移民労働力の流入が顕在化した時期といったように、多民族的状況の背景を全く異にしていること、それゆえエスニック構成、多民族的風景の意味が変質してきたことに留意すべきであろう。しかも近年の KL の日常的な民族景観のありようについて遊歩者フラスモール的なまなざしからみた場合、定住人口からみた多民族性の変質にとどまらず、文字通り、フローとしての（短期間の流動的滞在者とはいえ）外国人ツーリストの急増は、KL がこれまで経験してこなかった現象であると言えよう。

III. トランスナショナル都市化するクアラルンプル

1. 外国人労働者の急増／緊張する民族景観

急速な経済成長とメガプロジェクトの同時展開に伴い、慢性的労働力不足問題をかかえてきたマレーシアは、インドネシア人など外国人労働力への依存度をよりいっそう高めることになり、1990年代以降、外国人労働者が急増している。2003年5月現在、同国内には合法的外国人労働者が約120万人就労、全労働者の12%を占めるまでに膨張した⁵⁾。そのうちインドネシア人(60%以上)が最多数で、次いでバングラデシュ人(25%)・フィリピン人(7%)のほか、タイ・パキスタン・中国・ベトナム・インド・ミャンマー・ネパールな

どからの出稼ぎ労働者が就労している [Star: 18 January 2004]。不法移民・就労者を加えると約170万人の外国人労働者が同国内に、KL大都市地域にはそのうち約6割が居住・就労しているものと推定されている。ちなみに、彼らの主な職業分野は、建設・工場労働者、レストラン・食堂・屋台の従業員、ハウスメイドなどである⁶⁾。

建設労働者の賃金水準は低く(地元民の約半分)、居住条件も劣悪である。たとえば建設労働者は現場内の仮設住宅(*kongsis house*)、工場労働者は工場敷地内の寄宿舎や会社が借り上げた近隣フラットの一家族用ユニットに10～20人で共同生活をしている。雇い主から住宅提供されない者や不法入国・滞在者は、既存のスクォッター集落に居住したり、人目のつきにくい二次的密林などに不法移民集落をつくりだしてきたりした⁷⁾。マレーシア人によるスクォッター集落が減退していくなか、地元住民にとって外国人スクォッター集落はこれまで以上に脅威と映り、それは、外国人コロニーに対する呼称となって表れる。すなわちインドネシアやバングラデシュ、ミャンマーなどさまざまな国からの移住者が多かったある集落は「ミニ国連」と名づけられ【MM: 15 March 1996】、「ミニジャカルタ」と呼ばれたある集落は、「麻薬天国」という異名をもって KL 大都市地域住民の「頭の中の恐怖地図」にしっかりと刻み込まれた【MM: 9 February 1994】。LRT の建設現場に残された飯場に居残った外国人労働者の蟄集地は「リトルインドネシア」とも「リトルバングラデシュ」とも呼ばれたものである【MM: 29; 30 July 1998】⁸⁾。そして近年では「ミニハノイ」と呼ばれるベトナム人凝集地区も KL 郊外の



写真1 休日、街にくりだすベトナム人労働者
ペトロナス＝ツインタワー前にて
(2003年11月23日撮影)

工場地帯近傍に出現するようになった。

外国人労働者の急増に伴い、これまで以上に麻薬・マリファナ・窃盗・暴力事件などの犯罪が急増し、エイズや伝染病の蔓延がマレーシア社会を脅かしている、といったネガティブイメージが地元社会で広がり、強まっている⁹⁾。加えて、日常生活における習慣上の不理解による地元民との軋轢¹⁰⁾、国籍を異にする、あるいは同じ国籍ながらエスニック集団を異にする外国人労働者間の抗争¹¹⁾、売春・麻薬などの非合法活動と外国人との関わり¹²⁾など、外国人労働者をめぐる「問題」は連日マスメディアを通じて報道されており、地元民の外国人労働者に対する脅威・反感・蔑視を助長してきた。さらに、休日になるとKL内外の仕事場から繁華街に繰り出してきた外国人労働者が群集をなし(写真1)、平日とは異質な、奇妙な熱気と緊張を帯びた街の風景へと一変させ、マスメディアでもとりざたされることになる。こうした街頭に出現した可視化された外国人労働者は、そこに居合わせた地元民のみならず、TVを通して擬似体験した視聴者の心象風景の中で「街の秩

序を乱す過剰存在」と映し出されているのだ【Star: 25 January 2004】。

IV. 外国人ツーリストの急増／フローする民族景観

シンガポールやタイ、インドネシアに比べて、マレーシアは長年、東南アジアのツーリズムの中では劣位にあった。しかし、1990年代初めからマレーシア政府は本格的に「マレーシア観光年」キャンペーンを打ち出し、製造業に次ぐ外貨獲得源としてツーリズム分野の育成策を推進してきた。その結果、1998年にはマレーシアへの観光流入者数は550万人でしかなく、製造業およびヤシ油の産業に次いで第3位の外貨獲得源の地位にあったが、2000年からはヤシ油部門を抜き第2位の外貨獲得部門となり、外国人ツーリスト数も1277万人を数えるに至った¹³⁾。2001年ニューヨークでの、2002年バリ島での爆破テロは世界のツーリズムに衝撃を与えたが、マレーシアのツーリズムは堅調さを示し、2002年の外国人ツーリスト集客数は1330万人を数えた。2003年から04年にかけて、ジャカルタでの爆破テロ・イラク戦争・SARS・鶏インフルエンザ・南部タイにおけるイスラーム過激派による反政府闘争の勃発は、この国のツーリズム＝ブームに冷水をあびせた【NST: 29 November 2003】。とはいえ、「Cuti-Cuti Malaysia」(cuti-cutu: holidaysのマレーシア語)、「Malaysia Truly Asia」キャンペーンやマレーシア全土における観光開発が功を奏して、外国人ツーリストの入込み客数は2004年末で1570万人にまで増大をみた。

ところでマレーシアへの観光客の上位送出し国は、第1位のシンガポール、次いでタイ・

インドネシア・中国・日本の順となっており、マレーシア観光は近隣の ASEAN 諸国と東アジアからの訪問客を主としている。このほかに欧・米・豪の西側諸国のほか、2000 年からはアラブ・中東諸国からの観光客の流入が目立つようになった。近年、急増しているのは中国とアラブ（中東）諸国からであり、それぞれ 1999 年約 19 万 1000 人から 2002 年には 55 万人に、2 万 2000 人から 13 万人にまで急増した【NST: 29 November 2003】。

外国人観光客の KL への入込み客数は不明だが、南郊に新国際空港を擁していることから、KL がマレーシア＝ツーリズムの拠点であること、さらにマハティール前首相の肝いりで毎年開催されるに至った F1 グランプリなど世界クラスのスポーツイベント、1998 年 11 月の APEC や 2003 年 10 月の OIC（イスラーム諸国会議）などの国際会議が頻繁に開催されることによっても、数百万規模の外国人を集客していることは想像に難くない。

政府観光局（Tourism Malaysia）による「観光資源としての KL」のキャッチコピーは、マレー・中国・インドそして多彩な土着諸民族の歴史文化、いうなれば「Truly Asia」が凝縮された、そして歴史都市（旧植民地都市）と近代都市の要素が共存する「常夏の緑濃き美しい庭園都市」、ということになるが、そのために KL はワールドクラス＝シティにふさわしい快適な街の構造へと大改造され、街並みの「エステ」化が推進されてきたのである（写真 2）。

観光客それ自体は、文字通りのフロー（通過者）もしくはせいぜい週・月単位の短期滞在者にすぎない。しかし、地元民の視線からすれば、「A 人」や「B 人」が 1 年を通して



写真 2 繁華街のブリットピンタンを走るモノレール（2006 年 8 月 11 日撮影）



写真 3 ブリットピンタンのアラブ人観光客（2003 年 8 月 16 日撮影）

（とくに 7 月から 9 月にかけてのハイシーズンに）KL を訪れ、独立広場付近を中心とした旧植民地都市空間や KL 北郊のヒンドゥー教聖地パトゥケーブ、チャイナタウン、ブリットピンタン、ツインタワーがそびえたつ KLCC などの観光スポットや繁華街を散歩し、冷房のよくきいたショッピングセンターで買物をし、STARBUCS で一息ついている光景は、日常的であるがゆえに、KL のランドスケープ（landscape：景観）のみならず、民族景観をもトランスナショナルなものにしている（写真 3）。



写真4 チャイナタウンのアラブ人観光客
(2003年8月16日撮影)

外見上、日本人を除けば、シンガポール人・タイ人・インドネシア人・中国人などアジア諸国からの観光客のいずれも、地元民との親和度が高く、必ずしも可視的に民族景観の変化に強い影響をもたらすものではない。しかし、数の上から中位、下位にある欧米諸国の白人やアラブ系・アフリカ系観光客の増加はKLの可視的な民族景観を変質させ、非可視的あるいは地元民の意識面で新たな「緊張」をはらませつつある。

とくに可視的に際立った存在感を与えているのはアラブ系観光客であろう(写真3・4)。現地の英字新聞は次のような見出し付きで、アラブ系観光客のブームとその背景について報じたものである。

『アラブ人が大金をそそいでくれるおかげで
観光産業が急成長』【Sun: August 24, 2002】

『マレーシアに観光天国を発見』【NST: September 10, 2002】

『アミューズメントパークはアラブ人家族連れで大賑わい』【NST: September 10, 2002】。

これらの新聞記事を要約、紹介するならば、以下のようなだろう¹⁴⁾。

マレーシアの観光業界は、アラブ首長国連邦・カタール・サウジアラビア・クウェート・オマーンなどからの旅行客が続々と押し寄せてきて活気づいている。「9.11」以来、テロの恐怖におののきアラブ人をうさんくさく思う西洋諸国よりも魅惑的なイスラームの国、マレーシアを休息の場所として選ぶアラブ人の数が増えている。全身を黒い服で覆って目だけを出しているアラブ女性たちを見れば(写真4)、マレーシアへのアラブ人観光客の急増ぶりは明らかだ。

6月から9月の時期にアラブ諸国からの観光客が集中する。なぜならば、気温が40度を超えるこの季節は中東諸国では子供達の夏休みにあたり、避暑をかねてマレーシアにやってくるものとみている。そうした彼らにとって、マレーシアにはベナンやランカウィなど海岸リゾートがある一方で、キャメロンハイランドやゲンティンハイランドという冷涼な高原、そして治安がよく近代的な「熱帯の美しい庭園都市」KLなど、場所の変化に富むこの緑濃き国は樂園と映るのだらう。しかも年に3回、1カ月間ずつ繰り広げられるようになったメガセール(バーゲンセール)の第2期目は8月に開催される¹⁵⁾。本国では満喫できないショッピングがこの時期、堪能できるのだ。

マレーシアは穏健なイスラーム教国であり、いたるところにモスクもある。ムスリムにとって食事が安心してできるハラール(halal)保証付きの世界各地の料理、ケンタッキーやマクドナルドのファストフードも楽しめるのだから____。

こうした歓迎される外国人観光客の増

加と、地元社会の中でさまざまな軌轢を引き起こす厄介な「過剰存在」として眼差される外国人労働者の急増は、性格を異にするものの、グローバリゼーションの典型的な表出プロセスにほかならず、マレーシア、とりわけKLという「資本蓄積の劇場」にトランスナショナルな「フローする」民族景観を創り出そうとしている。

V. おわりに

1985年に筆者がはじめてKLを訪れてから20年余りを経た。この間、KLを訪れるたびに、KLというテキストは再解釈され、この街に対する私の心象地理(imagined geography)はいつも描きなおされてきた。それだけこの街のランドスケープ、民族景観、そしてそれを包み込むマレーシアという政治経済・社会文化空間が大きく変質をとげてきたということである。もはや、現前する21世紀初頭の「マハティールの都市」の風景から旧植民地都市としての履歴を読みとることは困難になりつつある。開発途上国都市的風景も可視的には急速に後景へと退き、溶解しつつある。2020年までにマレーシアを先進工業国の水準に到達させるとともに、KLを真のコスモポリタン=シティ、ワールドクラス=シティとして世界地図上に刻印しようというマハティールをはじめ家父長的権威主義的政治指導者たちの企図(「Wawasan 2020」)は現実のものになりつつある。しかしその過程において、KLに住まう人々は「マハティールの都市」をどのように「生きられる空間」として経験し、「消費」し、断片的な日常生活における実践を通じてかれら自身の「生きられる空間」を「生

産」していくのだろうか。さらに2020年のあとは、どのような都市空間が造形され、経験されることになるのだろうか。他方、数年間であるにせよ出稼ぎ労働者(あるいは不法滞留者)として、あるいはツーリストとして滞在する外国人にとって、KLとはどのような異郷と映るのだろうか。それらを解き明かしていくことが、この熱帯のメトロポリスをこれからも訪れるだろう筆者の課題である。

注

- 1) ブミプトラとは、サンスクリット語由来のマレーシア語で「大地の子」(sons of soil)を意味するが、これは華人やインド系移民集団に対してマレー人が「先住民族」であることを主張すべく政治的意図から創造された擬似的民族カテゴリーである。ブミプトラには、マレー人のほかに、半島マレーシアの少数先住民族のオランアスリ(3グループ/18サブグループ)、サラワクの土着諸民族集団(イバン・ビダユなど約30グループ)、サバの土着諸民族集団(カダザン・クィジャウなど32グループ)が含まれる。マレー人政治指導者にとってマレー人だけでは移民集団に対して数の上で圧倒的優位に立てないこと、またマレー人が移民集団に対して「先住民族」であることを主張するためには、その他土着民族集団を加えた新たなエスニック・カテゴリーを創りあげる必要があったのである。
- 2) マハティールの強権的開発政治、その政治哲学や手法に対する批判も多い。たとえば、マハティールによる20年余りの治世を回顧した次の論集を参照。Welsh, B. ed., *Reflections: The Mahathir Years*, Johns Hopkins University, 2004.
- 3) 「エスノスケープ」は、人類学者のアパデュライ(A. Appadurai)による造語である(アルジュン・アパデュライ(門田健一訳)「グローバル文化経済における乖離構造と差異」、思想、2002年1月号(No. 933)、5~31頁。(原著: Arjun Appadurai, "Disjuncture and Difference in the Global Cultural Economy", *Public Culture* 2-2, 1990, 1-23; Chapter 2 in *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, University of Minnesota Press, 1996)。彼はグローバリゼーションをめぐる議論を、国家という枠組みを超えるグローバルな(あるいはトランスナショナルな)5つの次元の文化フローについて言及を通して行お

- うとした際に、エスノスケープ (*ethnoscapes*)、テクノスケープ (*technoscapes*)、ファイナンスケープ (*financescapes*)、メディアスケープ (*mediascapes*)、イデオスケープ (*ideoscapes*) という5つの「-scape」という分析概念を提示した。そして、エスノスケープは、「今日の変転する世界を構成している諸個人のランドスケープのことである。つまり、旅行者、移民、難民、亡命者、外国人労働者などの集団的ないし個人的な移動は、国家の(そして国家間の)政治に、これまでにないほどの規模で影響を及ぼしているように思われる。」と定義、説明した。「エスノスケープ」を直訳すれば「民族景観」となるのだろうが、それにならえば、これまでの地理学的用法からすると「文化景観 (*cultural landscape*)」、「都市景観 (*urban landscape*)」のように「*ethnic landscape*」と表記されるべきかもしれない。しかしアバデュライがエスノスケープの構成要素として具体例としてあげているのが、外国人労働者、ツーリスト、難民などの文字通りのトランスナショナルな「フロー」であることから、また筆者の理解では、地理学的用法の *ethnic landscape* (民族景観) が可視的・客観的な意味合いが強いものに対して(近年では「景観」との差異化を意図して、主観的な意味合いを強め「風景」という用法が流行するようになったが)、エスノスケープは非可視的な、心象地理(想像の地理)の意味合いが強く、さらには景観要素としての「みられる側」、つまりフローとしての外国人労働者やツーリスト自身の「旅」経験や心象風景についても言及していることから、*ethnoscape* は *ethnic landscape* とは異質な概念であると言えよう。
- 4) (1) 藤巻正己「プミブトラ政策と都市社会変動—多民族都市クアラルンプルのスクォッター社会—」(アジア地理研究会編『変貌するアジア—NIEs・ASEANの開発と地域変容—』、古今書院、1990、所収)、183～205頁。(2) 藤巻正己「1970年代におけるクアラルンプルの社会地理—Dietrich Kühne “*Vielvölkergesellschaft zwischen Dorf und Metropole: Fortentwicklung und neue Wege der Urbanisation in Malaysia (1970-1980)*” の紹介と検討—」、立命館地理学 17、2005、55～77頁。
- 5) Ministry of Finance Malaysia: *Economic Report 2003/2004*, 2003, p. 67.
- 6) 藤巻正己「クアラルンプル大都市地域における外国系スクォッター」、立命館地理学 12、2000、19～42頁。
- 7) (1) 前掲6)、(2) Fujimaki, M. *Squatter Settlements by Foreign Workers in The Kuala Lumpur Metropolitan Area—A Preliminary Consideration—*, in Umehara, H. ed., *Agrarian Transformation and Areal Differentiation in Globalizing Southeast Asia: Proceedings of RU-CAAS Symposium held at Rikkyo University on November 1-2, 2002, 2003*, 241-265.
- 8) 藤巻正己「クアラルンプルの都市美化政策とスクォッター—新聞記事に描かれたスクォッター・イメージ—」(藤巻正己編『生活世界としての「スラム」—外部者の言説・住民の肉声—』、古今書院、2001、所収)、60～93頁。
- 9) Azm Zehadul Karim et al.: *Foreign Workers in Malaysia: Issues and Implications*, Utusan Publications and Distributions, 1999, 44-46. 一般市民だけでなく、政府指導者も、合法的かつ管理された外国人労働者の受け入れは歓迎したものの、非合法入国者・不法滞在者・社会文化的害悪を持ち込む外国人労働者に対しては徹底した厳罰主義を貫いた。たとえば、以下の新聞記事は政府指導者の立場をよく表している。「マレーシア経済は過剰なまでに外国人労働者に依存している。マハティール首相は、人口および経済規模のわりに外国人労働者が少ない日本との比較を通じて、繰り返しその危険性について言及してきた。日本には30万しかいない外国人労働者が、マレーシアには推定で170万もいる、という。このことはマレーシアの人口・経済規模両面から見てあまりにも外国人労働者に依存していることを示している。外国人労働者の多くはインドネシア系であり、サバの刑務所には現地人を上回るフィリピン人が収容されている。マレーシア国内で根絶させた病気やウィルスを外国人労働者が持ち込んできている。さらに彼らはスクォッター・コロニーをよりいっそう過密なものにし、我々の文化に対抗する社会的文化的要素をもちこんでいる…」【NSUNT: 24 August 1997】
- 10) たとえば次のような新聞記事の内容が好例であろう。「補食用に犬や猫を狩り集めていた5人のベトナム人、60人のインドネシア人、46人のネパール人が逮捕された。査察対象となった222人の外国人労働者の内、18人のインドネシア人は自発的に帰国し、48人のネパール人と45人のベトナム人は強制送還される見込みである。今回の取り締まりは、(ある)工業団地付近の住人が最近ペットがひんぱんに行方不明になることから当局に訴えたことをきっかけに発覚。逮捕された外国人労働者たちは、肉を買うだけの賃金を得ることができなかったため、犬・猫の肉を食べていたという」【NST: 30 July 2003】
- 11) たとえば、国籍を異にする外国人労働者間の抗争を伝える以下の2つの新聞記事を参照。「KL南郊にある繊維工場で、酒に酔ったベトナム人とインドネシア人の労働者との口論が引き金となって衝突が発生、66人が逮捕された。また別

の繊維工場でも50人以上のネパール人とバンダラデシュ人が乱闘を引き起こして逮捕、拘留された」【NST; *Star* 24 September 2003】。「2003年10月、KL南郊のグローヴ製造工場でインドネシア人とベトナムからの移民労働者が衝突、約40人が逮捕された。[...]同年9月23日には別の織物工場の宿舎の外で、6人のインドネシア人労働者が12人のベトナム人労働者により負傷させられたという事件があった。2002年1月17日には、約500名のインドネシア人労働者が同じ繊維工場で暴動を起こし、警察と衝突するという事件があった。16人のインドネシア人労働者は麻薬検査で陽性反応が検出され逮捕されている。[...]政府はこうした一連の事件を重く見ており、雇用主が、さまざまな国籍をもつ労働者同士が互いに意志の疎通をうまくするように特別なオリエンテーションコースを設けるべきだ、と勧告している」【*Star*: 27 October 2003】。また、同じインドネシア人とはいえ、出身地(民族的出自)を異にする集団間の対立が表面化する例もある。「KL郊外のニュータウン建設現場では、東インドネシアのフローレス島出身者とロンボック島出身者との間で大乱闘がおり、多数の死傷者と不法移民を含む89名もの逮捕者を出す事件が発生した」【NST; *Star*: 3 February 2004】。

12) 「KL西郊ニュータウン内のミニカジノや売春宿を営業していた違法ホテルが一斉手入れを受け56人が逮捕された。その内46人は外国人女性でカラオケラウンジやナイトクラブで売春をおこなっていたものとみられている。外国人女性の国籍と人数は、中国31人、タイ5人、インドネシア4人、カンボジア4人、ロシア2人。また8人の中国人男性とミャンマー人はウェイターをしていた。これらの外国人は適正な旅券を不所持、もしくはオーバースティしていた。店内には212人の客がいた」【NST; *Star*; *MM*: 23 February 2004】。

13) 藤巻正己「熱帯のメトロポリス クアラルンプル断章—スコッター都市から世界都市へ?—」、地域研究論集(国立民族博物館)Vol. 5 No. 2、2003、79～93頁。

14) 前掲13)

15) 2005年からは7月下旬から9月上旬までの年1回となった。

*文中で略称した新聞紙名は以下の通りである。
MM: *Malay Mail*, NST: *New Strait Times*,
NSUNT: *New Sunday Times*, Star: *The Star*, Sun:
The Sun